

## とらわれない

菅原英剛

そんなことで大腸がんの手術をしました。

そのときに、私は病院に『倫理経営原典』、『七つの原理』、『万人幸福の葉』この三冊を持ち込みました。そして、ずーっと思っていた「苦難は幸福の門。病気になるれば『おめでとう』と言う時代が来た」という箇所「丸山先生、がんの人におめでとうは言えないだろう」と思っていましたので、よし、答えを見つけようと思いました。

入院生活は暇ですから、朝から晩まで没頭して本を読みました。先生や看護婦さんは「宗教家かなにかだろう」と思ったことでしょう。

毎日、ひも解いて「どこかに答えがあるはずだ」と読んでいたら、『倫理経営原典』の353ページに「喜びという油を注げ」という言葉が載っていました。

それはどういうことかというのと、「はたらき」という鍵はすべて解決する。その鍵には喜びという油を注がないと、鍵穴にうまく入らなかったり、鍵自体が折れたりしてしまう。喜んで働かなければダメなんです。

これだ！

仕事も倫理も心底喜んでいただろうか？ 喜びが足りなかった。この油が足りなかったから、折れてしまったんだ。

それに気づいたら、すーっとして、死も怖くない、手術も怖くない、なんともいえない気持ちになりました。

孔子様の「朝に道を聞かば、夕べに死すとも可なり」という言葉を思い出しました。

この言葉はわたしにとっては孔子様にしか得られない境地で、凡人のわたしには難しい境地だと思っていました。しかし、このときにすぽっと入ってきたんです。

おー、孔子様の気持ちがわかった。悟ったような気がしましたね。

それから手術するときは、女房に「誰も呼ばなくていいから。亡くなれば、それが寿命。生かされれば、それもまた寿命。行ってくるかんね」と、にこやかに手術室に行ったんですね。

それで無事帰ってきました。

おー、まだ生かされている。まだやれということだな、と思いました。そして、これからは喜びの油を注いで生きよう。がんは笑って治そう、と決心をしました。

手術が終わってから、先生に「麻酔がかかっているから、もし痛みが激しくなったら追加しますから」と言われたんですが、そのときにわたしは、

「わたしの痛みですから大丈夫です」と、きつぱりと断りました。

わたしが高校時代に読んだ吉川英治も、死ぬ前に相当痛みのあるがんを患ったみたいですが、その婦長さんの談話によると「吉川先生は、人に全然痛みを見せなかった、素晴らしい人だ」と讃えていました。吉川を指そうと思っていました。

また、丸山敏雄先生が牢獄に入って「痛みを超えた」というエピソードも読んでいたので、追加の麻酔を断れたときに「おお、吉川英治と、丸山敏夫と並んだ」と錯覚したのでした。

そして、先生から「がん細胞がリンパ腺に入っていて再発する恐れがあるから、抗がん剤を飲みなさい」と勧められましたが、これまた「笑って治しますから大丈夫です」と断りました。

それから二年半が過ぎました。

ただ、「笑って治す」といっても、がんが治らなかつたのは、やっぱり日頃の食生活を含めた生活態度が、以前に戻ってしまったというのがあると思います。

そのあと、去年の3・11が起きまして、毎日、テレビで大震災の映像を見ながら涙を流していました。

そして、丸山先生は「これでよい」「すべてを受け入れる」と言うけど、これはよくねえだろー、と思いました。

その時に、金ある人は何億、何十億って出すんですね。ボランティアに行く人がいて、日本が一つになって、いままでバラバラで金さえあればと言っていた日本が、本来の日本に戻ったような気がしました。みんないつ死ぬかわからない、そして、「自分ができることはなんだろう？」と考え出しました。

素晴らしい日本人の底力を見て、なるほど、二万何千人の人々が犠牲にはなつたけれども、これで日本が一つになれるんだ、と思うと、丸山先生の「これがよい」が腑に落ちました。

その後から、私のテーマは「究極の楽天主義、これがよい」と決めました。

それからは「何でもすべてを受け入れればいいんだ」という気持ちになりました。そして自己満足で「これが良い、これが良い、これが良い」でずっと来たわけですね。

今年に入って2月3日、肝臓が痛くなつたんですね。

私は昔から大酒飲みで、大好きな池波正太郎が「肝臓が腫れるとわかるから、揉みながら飲む」と書いていたものですから、わたしも肝臓を揉みながら飲んだような男でございます。ですから、だいたい肝臓の位置はわかっていたんですが、2月3日に痛みが走って、「肝臓に痛みがきたらもう手遅れ」というのはずーっと昔から頭にありましたから、

「よっ、まずいなー、痛いなー」と。

2月4日にはちようど、鬼怒川で（倫理法人会の）方面会がありまして、鬼怒川で六県の会長・専任幹事が集まって、勉強会があったんですが、

「これはドタキャンかよー」

と思いましたが、女房が湯たんぼを持ってきて「温めたらいいよ」と温めました。すると、次の日、ケロツと痛みが取れたんです。

これは「方面会に行け」と言っているんだ。大切な学びがきつとあるんだ。と喜んで行きました。

そこで本部長の話がありました。

私は、本部長はタバコが好きで吸っていて、やめる気のない男なんだと思っていました。タバコは嗜好品ですから、タバコによって生かされる人もいるわけですから、本人がそう思っているのであればタバコをやめる必要はない。

しかし、本部長の話を聞いてみると「やめようと思ってもやめられなかった。酒はやめたけど、タバコは違う」と言うんですね。

私からすれば酒もたばこも一緒なんです。あれだけ倫理学んでいるひとが「俺にはできない」と決めつけて、タバコにとらわれている。はー、なるほどなあ、人間というのはとらわれちゃってるんだな、とそこで思いました。

そして帰ってきて、自分で医者に行き、検査をしました。

ちよつと時間がかかったんですが、三月五日にその結果を聞きに行きました。そしたらなんと、

「菅原さん、肝臓に三分の一くらいのがんができています。もう手遅れ。治らない。半年の命。抗がん剤をやれば、もしかしたら20か月に伸ばせられるかもしれない」とこう言うんですね。

そこでスパッと私は、抗がん剤治療ではなくて、民間療法でやることを伝えました。抗がん剤を打って痛みになつて生きていてもしょうがない。医者がそんなに生きられないというなら、無理して伸ばす必要はない。それも寿命だと思つて、いいですということ、帰ってきました。

しかし、やつぱり、とらわれるんですね。

一週間くらい「自分が半年後に死ぬ」という余命宣告が頭から抜けないんですね。

笑っちゃうんですけど、「半年後に亡くなるのであれば、喪服を用意しろ。クリーニングにかけておけ」と言ったんですが、「お父さん、自分の葬式は喪服はいらないわよ」と言われまして、「あーそうだ、白いの着るんだ。いらねえわこら。アハハ」と大笑いしました。

そのくらいのおきなな父さんだったので、ただやつぱり、とらわれちゃう。倫理の本部長もとらわれるくらいですから、とらわれるんですね。意識がもう半年後の死に向かっている。振り払おうと思つても、なかなか振り払えない。

次の週、ちょうど埼玉のスーパーバイザーが宇都宮西で講話をしてくれて、そこで急ぎよ倫理の指導を受けたわけです。

わたしのいきさつ、「こうきてこうきてこうなって、今、とらわれちゃっているんで、とられない方法はありますか」と聞いたら、

「うーん、菅原さん、実践が足りない。あちこち行って勉強した。モーニング出た、なんだって言っているけど、学んでいるだけじゃなくて、実践だよ」

朝起きたらちゃんと女房にあいさつ。まあ、女房にはそれ以来挨拶していますが、朝顔を合わせた時は挨拶している。ゴミが落ちていけばゴミを拾う、など倫理の学びを実践する。気づいたらすぐやる。倫理を学んで、何のためにいるかといえば、まず家族をよくする、会社をよくする、会社が良くならなければ倫理を学んでいることにはならない。会社が良くなって、会社の社員が良くなれば、地域をよくする、そして、ゆくゆく日本を創生になってくる。日本の総理大臣があだこうだと大きいことを言っても、あなたが変えられることは何もない。批判しても何も変えられない。今できることをやるしかない。家族、会社、それを実践していくのが倫理。学ぶことだけじゃだめだ。

「菅原さん、頭でっかちになって学んでばかりいるから、書を捨てる。勉強しなくていいから実践に徹しろ。気づいたことをばっばとやっていけば、半年後とかそんなのは全然なくなるから。今を生ききってやってごらん」

「はー、なるほど。ありがとうございます。それは素晴らしい教えでしたね」  
そうだ、あとは実践に徹しよう。と思いました。

しかし、なかなか体調が良くならないので、今度、万が一のために病院を変えてがんセンターを紹介していただきました。

3月16日にごんセンターの方に行きました。血液検査・CT検査をして、がんセンターから「緊急で来なさい」と連絡が入って、先生にお話聞いたんですが、CTを見ながら

「菅原さん、肝臓の半分がんに侵されている。どう考えていますか？」

「いや、半年生きるって3月に言われたので、」  
「そんな状況じゃないよ。週単位。来週死んでも、再来週死んでもおかしくない」と言われました。

「えーっ」と驚きました。

でも「もう処置はなにもない」といわれました。入院しても何も無いんですね。

これは驚きましたねえ。ガツンと来ました。さすがにとらわれないと思っただけでも、「いや、そうかよ」と落ち込みました。しかし、気持ちを下げてはいけないと思い、「俺は生きる！ 生きる！」ときました。が、やっぱりだんだん調子が悪くなってくるんですね。

そして、別の民間医療のものを変えてみたら、少し元気が出てまいりました。でも毎日上がり下がり、調子がいいと思えばぐたつと来るし、便の色も白くなってですね、胆汁がもう出なくなってきたらいるんですね。

いやー、これはまずいな、と思いながらも、気力で、気力で何とか食べて参りましたが、調子悪くなつて、またお医者さんに一週間単位で診てもらおうようにしてましたが、「明日死んでもおかしくない」と脅かされました。

「いやー、これはまずいな」と思つて、

「いまを生きよう、明るく」「とらわれない」という気持ちでいますが、なかなかこの「とらわれない」というのは、難しいなと実感しております。

しかし、夢はまだまだ諦めているわけではございません。まだまだ生きようという気はしております。そんな気持ちですが、だんだん体が萎えてくると心も萎えちゃうんだなあと、気合を入れ直しながら、日々、自分は「明朝、明朝、明朝」というかたちで、やるようにしています。

今回のことで、色々みなさんにはご心配をかけて、本当に涙がでるような「これを飲んでみる」「これがいいぞ」有難い言葉。ある方には「医療費は持つから、ここの病院に行つてみる」とあたたかい言葉をかけていただきました。

涙が出るようなことがいっぱいありまして、本当に感謝しております。その感謝に報いるために、「まだまだ、やらねば」という気持ちが出ております。

「菅原、死ぬまで生きております」

これは、私が尊敬する田坂広志さんの講話を聞きに行ったときに出会った言葉です。

彼が昔後何か月の命と宣告されたときに、お寺さんに入ったんですね。その時に一生懸命に自分を見つめていたわけですが、あるとき老師が来て、

「田坂さん、そういえばあと何か月という命つて言われているんだよね」と言つたそうです。

「そうなんです」とするようないい感じで、その老師から何かお助けの言葉を聞けるんじゃないかと思つて待つていたら、

「あそう、でも死ぬまで生きているからね」と言われて、

「え、なにそれ」と思つたんですが、彼は考えました。

そうだよ、死ぬまで生きているんだ。こんなお寺に入っている場合じゃない、やれることをやんなくちゃ。

そして、そのお寺を出て、やることをやつていった訳ですね。

彼は60歳でわたしと同じ年ですが、今も元気に。この間、菅さんに頼まれて国のかじ取りに関わつたような人です。まさにスパッパツと自分の意見をいう、素晴らしい方だと尊敬しております。

まあ、そういつたいろいろの人との出会い、いろいろの人から影響を受けて今があります。本当に倫理を学んでいなければ、この境地に達しはしなかつたかなと思います。

そして、わたしみたいな凡人は、こういう大きな衝撃がないと気づかないみたいです。

柳生家家訓で「小才は、縁に会って縁に気づかず。中才は、縁に出会って縁を生かさず。大才は、袖擦り合う縁をも生かす」と言いますが、まさに縁というか、気づきに置き換えると、大才の方は小さなことでも気づく、中才の方は大きなうねりが来た時に気づく、そして小才の方は目の前に来て、死や倒産など大きなことを目の前にして気づくんですね。わたしみたいな凡人は、本当ここに来て、こういうことがないと気づかなかったんだなあ。でも気づかされて良かったです。

いまのところ、一切死に対する恐怖はありません。

これは丸山敏雄の死生観で「無から有から生まれぬ」というのがあります。

有から有、いまここにいるということは、父の体と母の力を借りて、この世の肉体として生まれてきましたが、その前に大宇宙から来ている。だからこちらが仮の宿であって、本来は宇宙からお役目をいただいて来ている。お役目が終われば、そのときが寿命。いくつでも寿命。

来たときには親族に喜ばれて生まれてくるわけですが、帰るときは縁がある方は悲しむだろうと思いますが、自分本人としては元に戻るわけですから、喜んで寿命を全うして、喜んであちらに帰ろうと思っております。

ですから、全然いまのところは、死の恐怖感はありませんので、これも、本当に倫理に学ばせてもらったおかげです。

いまこの境地は、倫理のまだまだ過程でございますが、「深いなあ」としんみり思っております。

本日はみなさま、拙い話でございましたが、聞いていただきまして、感謝でございます。そして、みなさまの熱い思い。倫理の友は「真の友」と思っております。本当にみなさま、ありがとうございます。

菅原は諦めたわけではございません。まだまだ命の限り生き抜いて、死ぬまで生きております。これからもよろしく願います。

今日のご清聴、どうもありがとうございます。